

V 総 括

1 本研究の到達点

本研究の端緒 およそ10年前、古代地鎮具の調べ物で、やむなく「大日本古文書 編年文書」を手にした筆者は、そこに土器の名前がときどき出ているのに気づき、やがてそのことが段々気になりはじめ、しまいにはどの巻のどこに、どの名前の土器が載っているかをノートに書き留めるようになった。もともと先史考古学に関心があった筆者にとって、考古遺物の真の称呼はほとんど「わからない」ものであったから、古器名の数々はじつに新鮮であったといえる。例えば有史以前の土器や石器が、その使用者たちによってどう呼ばれていたかは、永遠にわからない。しかし正倉院文書には、今まで全然知らなかった土器の名前がいくつも載っていて、それが考古学上のどの器種にあたるのか、とても気になって仕方がない。これが、筆者による古器名研究の端緒である。

本書は考古学上の器種名と土器の古器名との照合にかんして、およそ100頁を費やし、どの土器がいつ・どの写経事業のときに用いられたかや、その員数と人員数との相関にも一定の注意を払った。この点は、本書の方法的特色であるといえよう。本書Ⅱ章において明らかにできたのは、およそ次の事柄である。

東大寺写経所 天平勝宝年間から天平宝字8年にかけて、この事業所で実施された写経事業のうち、帳簿類から給食用食器がうかがえるのは、古い順に

- ① 写書所（天平勝宝3・4年）
- ② 御願経（天平宝字2年）
- ③ 奉写称讃経所（同4年）
- ④ 周忌斎一切経（同4・5年）
- ⑤ 造石山院所での大般若経書写（同6年）
- ⑥ 奉写二部大般若経（同6・7年）
- ⑦ 大般若経（同8年）

である。これら以外にも、法華寺造金堂所（同4年）で用いられた食器の種類・員数や、上山寺悔過と吉祥悔過（同8年）のときに用いた食器の種類がわかる。

このうち、①写書所では筥+水埴+片坏（坏）+塩坏+佐良（盤）の五器が請納帳に見え、②では水埴+羹坏+饗坏+片盤の四器が実際に支給された。次いで③のときは碗形+大片埴+陶坏+塩坏+盤の五器で、④のときは方々からかき集めた陶片埴+土坏+塩坏（饗坏を含む）+佐良の四器を食器に充て、⑥のときはその決算報告案より、大筥+埴+片埴+羹坏+塩坏+盤（大筥以外はすべて陶器）の六器であった。そして⑦でも、予算書案では大筥+陶水埴+片埴+坏+塩坏+陶佐良の六器を計上しており、奉写二部大般若経のときと同じ食器構成であったと考えられる。さらに臨時の写経所でおこなった⑤でも、筥30口に対して陶埴40口と片埴・陶坏・塩坏・陶盤各60口を数えているから、上述の六器セットと同じ食器構成が想起される。

これを要するに、天平宝字年間の東大寺写経所では、次の2種類の基本構成がうかがえる。

碗＋羹坏（坏）＋塩坏（または饗坏）＋盤……………四器（筥をくわえると五器）

碗＋片碗＋羹坏（坏）＋塩坏（または饗坏）＋盤……………五器（筥をくわえると六器）

天平宝字年間に実施された3～6か月程度の写経事業では、予算書案上の架空の食器が、その後実際に入手され使用されたと考えられる場合（⑥・⑦）がある。また事業期間中の雑物納帳などに見える食器（①・④）は、一人前の食膳具を構成したであろう。これらの例からは、この間に食器の交換や補充はほぼなかったか、あっても限定的であったと考えられる。そしてそれぞれの事業について判明した経師らの推定従事者数を勘案すると、身分に応じて食器セットが一律ではなかった可能性があるものの、いちど支給された食器をたびたび交換する機会は、ほぼなかったといっていよう。

奉写一切経所 大般若経書写（天平宝字8年）を終えてから、東大寺写経所は一時休業状態にあったが、神護景雲4年夏から奉写一切経所として活動を再開し、以後宝亀7年6月まで一切経書写を実施している。この期間のうち、給食用食器の種類と消費状況が明らかなのは、始二部一切経書写事業（宝亀3年2月～同4年6月）のときである。このときは事業引き継ぎ時に、奉写一切経司から給食用の食器を大量に受給しており、以後20か月におよぶ消費の記録が追跡可能である。しかしいい方を変えると、このときは天平宝字年間の各事業とは異なり、そこで使用された食器セットを復元しづらい。最初に一括で支給された食器の員数は、その事業規模や人員数に応じて組まれた予算案上の見込み数や、雑物納帳に見える何人分かの食器構成を想起しやすい員数とは異なるからである。したがって実際の食器セットは、その膨大なストックのなかから、月ごとに逐次卸していった土器の組み合わせとして、復元的に再構成されるわけである。

宝亀3・4年における食器の消費過程からわかるのは、食器の減り方に著しい緩急があることである（34頁のFig.13）。もっとも急激に減っているのは宝亀3年の陶枚坏で、これと同様の減り方をしたのが土窪坏である。飯器と目される土鉢形や、減り方がおおむね一定している土枚坏を標準とすると、陶枚坏・土窪坏の消費は異常である。しかし宝亀4年になると、陶枚坏・土片坏の減り方はしごく穏やかとなり、土鉢形や土枚坏とはほぼ同程度となる。宝亀3年分の土器の消費は、もともと参考のできる告朔解案が少ないこともあり、何か常態ではないようにも見受けられるので、食器構成の復元は宝亀4年の消費動向にもとづくべきであろう。結局、どうして陶枚坏と土窪坏との2種類が、宝亀3年に大きく目減りしたかはよくわからないが、この間特殊な減損が上乘せされているのであろうか。とはいえ、宝亀4年における陶枚坏の消費がまったく低調であることから、これに代わるのが土枚坏であるとみた場合、復元できるのは土鉢形＋土枚坏＋土窪坏＋盤（土・陶）という四器構成となろうか。なおこのとき、20か月間にわたりほとんど減らない土水碗は食器構成に含めない。また、東大寺写経所では多用されていた陶碗は、一部で「硯并筆漬料」（「奉写一切経所告朔解」、大日古6-305および6-393）として垣間見えるものの、食器として実用された形跡はない。

この四器構成は、明らかに土師器と陶器（須恵器）との混成として復元され、しかも宝亀4年にかぎっていえば、土師器主体の食器セットであったとみられる。この点は、判明するかぎりでは須恵器中心であった東大寺写経所の食器構成（大筥をくわえると五器ないしは六器となる）とは大きく異なる。土師器中心の食器構成が、このときにわかに出現したのは、ひとえに一切経司から引き継いだ食器が、多量の土師器を含んでいたことによる。要するに食器の入手法のちがいが、結果的に食器構成に表出したのである。

食器構成の復元案 上記を踏まえつつ、Ⅲ章では土器群ごとに土師器食器と須恵器食器とを計量的に

分類しなおし、IV章において考古学的器種と古器名との対比をおこなった。そしてその結果、平城宮・京で出土する土師器や須恵器の食器を、およそ次のように整理した。

土師器食器のほうは、今回の計測結果においても皿 A I、杯 A I・杯 A II、杯 C など、そして椀 A という4つのまとまりを識別できた。ただし、杯 C と同等の大きさをもつものとして、杯 A III（平城宮 SK820）や椀 D（平城京 SD5100）と呼ばれてきた器種もあり、実用上は同じ器種である。これら浅形の食器は、平城宮における土器研究が開始された頃、皿 A II（平城宮 SK219）として一括されており、そのようにまとめるほうが、古器名との対比が容易になる。そこで宝亀年間の奉写一切経所で用いられた土師器の四器を、現用の器種名を用いて再現すると、

土片壺・・・杯 A I（深浅二形に応じて土鉢形と土片壺に分かれる可能性あり）

土片坏・・・杯 C I ないしは皿 A II

土窪坏・・・椀 A

土片盤・・・皿 A I

となろう。この四器構成を、平城宮 SK219 出土の土師器食器で再現したものが図版4である。

須恵器食器のほうは、写経所文書に陶水壺、陶坏、陶盤などが見えるほか、単に羹坏・塩坏と書いて、じつは陶器のそれを指したとみられる例があることから、本書ではこれらが須恵器食器に固有の名前であると考えた。つまり水壺、羹坏・饗坏・塩坏は、その名前に「陶」字を冠していなくても、多くの場合で須恵器であったと思われる。また麦壺は、文書では1箇所しか登場しないが、現に「麦」「麦壺」と書いた須恵器杯 B I の出土例があり、それが陶器であったのは明らかである。反対に、土師器とわかるのは土水壺くらいで、土師器の麦壺や羹坏・饗坏などは確認できない。用途を暗示する名称は、おもに須恵器食器にかざられる。

したがって、平城宮・京出土須恵器のなかから候補を見つけ出すべき器種は、陶水壺・麦壺と羹坏・饗坏・塩坏、それに陶片壺と陶盤の7種類となる。しかしながら、天平宝字年間から宝亀年間にかけての土器群（平城宮 SK219、同 SK19189・19190、同 SK2113）は土師器主体なので、須恵器の様相が必ずしも明らかではない。そこで、やや年代がさかのぼるが、平城宮 SK820 と、平城京二条大路 SD5100 の須恵器を食器構成の再現に用いた。2つの土器群はいずれも多法量的な様相を呈し、しかも両者間で考古学的器種の分類法が必ずしも同じでないこともあり、考定作業は容易ではないが、本書における解釈を次に掲げておく。それを用いることは必ずしも最良ではないが、とりあえず現用の器種名を用いて近似的に再現すると、

陶 壺・・・杯 A I₁（深形食器）・杯 B I（深形食器）

陶片壺・・・杯 A I₂（浅形食器）・杯 C I

陶羹坏・・・杯 A III・杯 B III

陶饗坏・塩坏・・・杯 A IV・杯 B IVおよび杯 B V

陶 盤・・・皿 A I・皿 C I

となる。土師器とはことなり、須恵器の壺・坏類には、高台の有無で2つの類型がある。陶壺には水壺と麦壺とが含まれることがわかっているが、両者のちがいはなお明らかでない。また、陶塩坏が饗坏と合算される例があったことを考慮すると、両者の境界もあいまいである。実際の土器では、小口径食器（口径100～120mm）を一群とみなすべきか。このように整理しても、なお余るのがSK820で「杯 A III」とされたものの一部である。口径125～150mm、器高60mm前後の深形壺で、これらをいかなる器種に対

比すべきか、いまはわからない。また、既往の分類で杯 A II または杯 B II とされたクラスタの独立性は、今回の計測結果では確認できなかった。

天平宝字年間の東大寺写経所で用いられた須恵器の食器構成を、平城宮 SK820・平城京二条大路 SD5100 出土須恵器で試みに再現すると、図版 3 のとおりとなった。ここでは無台食器で一人前の食器構成を組んでみたが、須恵器の胎土や焼き・質感などが筆者のイメージどおりではないので、いずれは同年代の須恵器食器で撮り直しができたらと考えている。

2 展 望

食器の消費にかんする研究 しかし果たして、この一書のみで西弘海の到達点を超越することができたのであろうか。もとより、そのことを目標に掲げていたわけではないが、こうして大部分を書き上げてみると、どうにも気になるのがこの点である。第一に、西が 40 年以上前に公表した論文「奈良時代の食器類の器名とその用途」¹⁾ とはその構造がよく似ている。計量的データにもとづいて平城宮・京出土土器を整理し、それらに古器名を当ててゆくという基本的な方法は同じであるし、またその結果もある程度は似通っている。方法の類似が、同様の結論を導き出したといえるだろう。上で述べたように、本書では写経事業ごとに食器の入手から消費の過程までを視野にいれつつ分析をおこなったつもりだが、こと食器構成の復元にかんして、西とは大同小異の結論にいたるまでに、わざわざ経師一人ひとりの仕事ぶりまで調べ上げるという膨大な手間暇、または遠回りが必要だったかと思わないでもない。単なる食器構成なら、一通の予算書案があれば、およそ見当がつくことではなかったか。

ところで西弘海以前における正倉院文書所載土器の研究で、とりわけ異彩を放つのが田中琢の「土器はどれだけこわれるか」²⁾ である。これは奉写一切経所関連文書（宝亀 3・4 年）を用いつつ、土器が消耗してゆく様子を再現しようとした意欲作で、50 年を経た今でも、その手法は斬新に見える。田中の所論は、土器がこわれることによって置換されていったという前提のうえに成り立っており、この点筆者には疑問があるが、とにかく正倉院文書を用いて土器の消費を考えようとする明らかな姿勢は、西の研究には見られない。田中のこの研究は、その跡を継ごうとする研究者が一人も出なかったけれども、それゆえに今でも、その豊かな可能性が残されている。そして筆者には、その続きを実行できる能力を有するのが、ひとり筆者のみであるように思われてならない。経師たちの人数把握にこだわったこと、経師一人ずつの事績を調べ上げたことが生きてくるのはきっと、そこでの土器の消費を詳しく明らかにしたい場合においてである。人員数と土器の用口数、または人員の出入りと土器の消費とが、何らかの対応関係にあると今では考えられるからである。

よって以後は、本書には間に合わなかったが、奉写一切経所における土器の消費に焦点を当てた研究をおこないたいと思う。その結果明らかになるのは、考古学のみでは決して明らかにできない事柄である。そしてそのことが、平城宮・京から出土する土器の消費をどう考えるかについて、新たな視点をもたらすであろう。

補 註

1) 西 弘海「奈良時代の食器類の器名とその用途」(『奈良国立文化財研究所 研究論集 V』、1978 年)。

2) 田中 琢「土器はどれだけこわれるか」(『考古学研究』12-4、考古学研究会、1966 年)。